

各関係機関団体の長  
各病虫害防除員 殿

福岡県病虫害防除所長

平成24年度病虫害発生予報第12号（3月）について

このことについて、病虫害発生予報第12号を発表したので送付します。

## 予報第12号

### いもち病の対策は、種子消毒の徹底からはじめましょう！

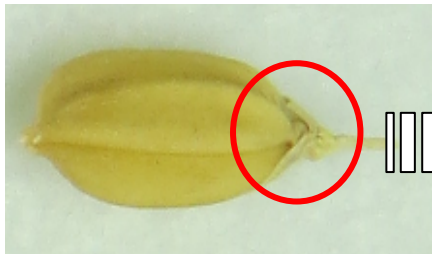
イネのいもち病は種子が第一次伝染源となるため、34産地・85地点の籾の保菌率調査を行いました。その結果、品種により異なりますが、全体では平均0.75%の保菌率でした（前年0.69%）。

ほ場での発生は、播種後の気象に大きく左右されるので、適切な防除に心がけてください。

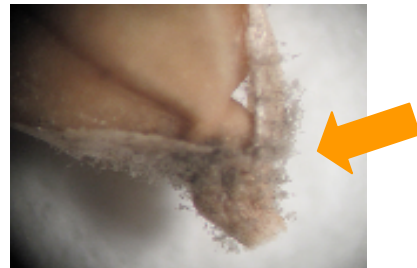
<防除の考え方>

- ・種子の外見が健全でも、いもち病菌に感染している場合があるので、種子消毒を徹底する。
- ・QoI 剤耐性のいもち病菌が確認されているため、適切な防除薬剤を選択する。
- ・田植後も予察情報等を参考に、発生状況に注意し、初発生の確認と適期防除に努める。
- ・具体的な防除対策は、県ホームページに掲載している『病虫害・雑草防除の手引き』を参考にする。

URL：<http://www.pref.fukuoka.lg.jp/d05/tebiki.html>



籾での感染の様子（シャレで3日間湿潤処理）



いもち病菌

### カキにヒメコスカシバの被害が増加

ヒメコスカシバの被害は主枝、亜主枝の分岐部や太枝から発生した新梢基部に多く、幼虫が虫糞を外に出しながら樹皮下を食害するため、樹皮が剥がれ木質部が露出します。

新梢や細い枝の基部が環状に加害されると、枝や果実の生育が悪くなるとともに、風などで折れやすくなります。

一度被害を受けた部分は、粗皮が荒くなるため、産卵が集中して被害が大きくなります。

防除対策は、発芽前（3月中下旬）の粗皮削り後の薬剤処理や、成虫発生前の4月中下旬のフェロモンによる交信かく乱が有効です。



ヒメコスカシバの加害状況  
（樹皮を剥がした状態で、赤丸内が幼虫）

3月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

主な病害虫の発生予報概要

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (3月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
冬春イチゴ	うどんこ病 ハダニ類	少	少	並
		並	やや多	並
冬春ナス	すすかび病	少	少	少
冬春トマト	葉かび病 灰色かび病	少	少	並
		並	並	並
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病	やや少	やや少	並
		多	多	多
野菜共通	ミナミキイロアザミウマ	多	多	多
	ナス	並	並	やや多
	キュウリ	並	並	やや多
	コナジラミ類	並	並	やや多
	ナス	やや少	やや少	やや多
	トマト	並	並	並
茶	カンザワハダニ	少	やや少	やや多
			*発生時期：やや早	

\*茶の発生量（現況）は、裾葉での発生量を示す。

<予想される向こう1か月の天候（平成25年2月23日～平成25年3月22日）>

天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の気温は平年並か高いでしょう。降水量と日照時間は平年並でしょう。

週別の気温は、1週間目、2週間目ともに平年並か高いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

要素	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	20	40	40
降 水 量	30	40	30
日照時間	30	40	30

（福岡管区気象台 平成25年2月22日発表抜粋）

作物別発生予報

注①：この予報は病害虫防除所の現地調査結果に基づき、情報作成会議を経て作成しています。

注②：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示します。

【野菜：冬春イチゴ】

1 うどんこ病

（1）予報の内容

発生量：平年より少、前年並

## (2) 予報の根拠

ア 2月5日半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

発病株率 0% (平年 0.8%、前年 0.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並とされている(±)。

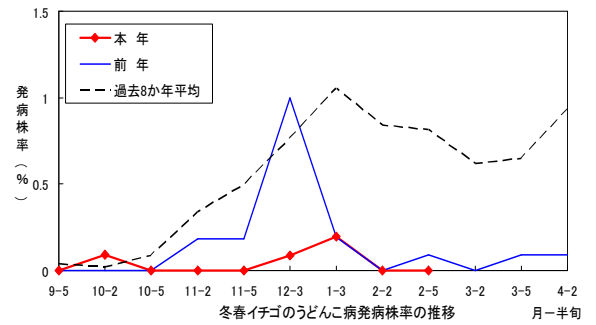
## (3) 防除上の注意

ア 早期発見に努め、下葉かき後、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

イ ハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

ウ 薬剤耐性菌の発生を防止するため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 8の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



## 2 ハダニ類

### (1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

### (2) 予報の根拠

ア 2月5日半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生株率 14.7% (平年 15.2%、前年 19.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並とされている(+)

### (3) 防除上の注意

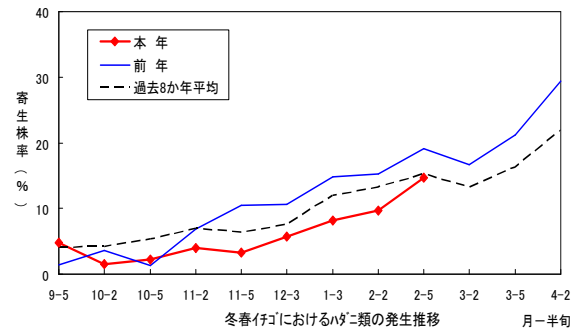
ア 本種は、はじめスポット的に発生し、下位葉ほど寄生

が多いので、葉かき等の管理作業時によく観察し、発生を認めたら早めに防除を行う。

イ 防除は摘葉後に行くと効果的である。その際葉裏に薬剤が十分にかかるようにする。

ウ ほ場内と周辺の除草を徹底する。また、摘葉や除草した雑草は、ほ場内に放置せず、ビニル袋に入れ密閉して処分する。

エ カブリダニ類等を放飼しているほ場では、天敵に対して影響の少ない殺ダニ剤を散布する。



## 【野菜：冬春ナス】

### 1 すずかび病

#### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

#### (2) 予報の根拠

ア 2月5日半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

発病葉率 6.6% (平年 20.2%、前年 30.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並とされている(±)。

#### (3) 防除上の注意

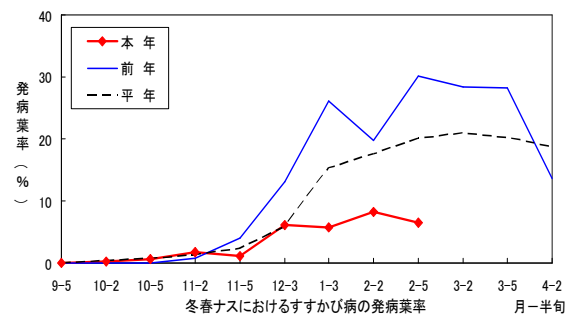
ア 多湿条件下で発病が進展・増加するので、施設内の換気を図る。

イ 草勢の衰えは発生を助長するので、適正な肥培管理を行う。

ウ 病徴が進展してからでは防除が困難なので、発病初期に防除を徹底する。

エ 罹病葉はできるだけ除去し、ほ場外に持ち出し処分する。

オ 薬剤耐性菌の発生を防止するため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



## 【野菜：冬春トマト】

### 1 葉かび病

#### (1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

#### (2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

発病葉率 0.2%（平年 4.2%、前年 0.4%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並とされている（±）。

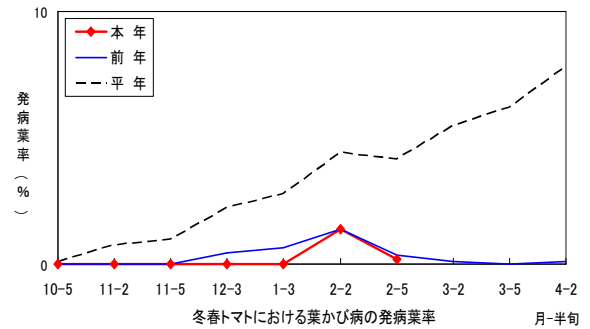
#### (3) 防除上の注意

ア 薬剤は葉の裏側にも十分かかるよう丁寧に散布する。

イ ハウスの換気を行い、多湿にならないように管理する。

ウ 肥料切れを起こすと発生しやすくなるので、適正な肥培管理を行う。

エ 抵抗性品種での発生も確認されているので、抵抗性品種を栽培しているほ場でも、葉かび病の発生に注意する。



### 2 灰色かび病

#### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

#### (2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病果率 0.2%（平年 0.3%、前年 0.2%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並とされている（±）。

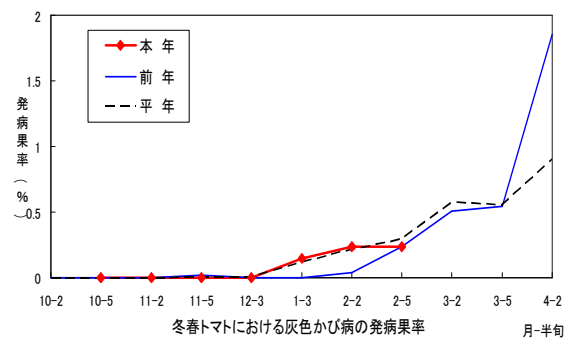
#### (3) 防除上の注意

ア 罹病葉、罹病果は見つけ次第処分する。

イ ハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

ウ 開花後の萎れた花卉や葉先枯れは、伝染源となるので取り除く。

エ 薬剤耐性菌の発生を防止するため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



## 【野菜：冬春キュウリ】

### 1 べと病

#### (1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

#### (2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－）。

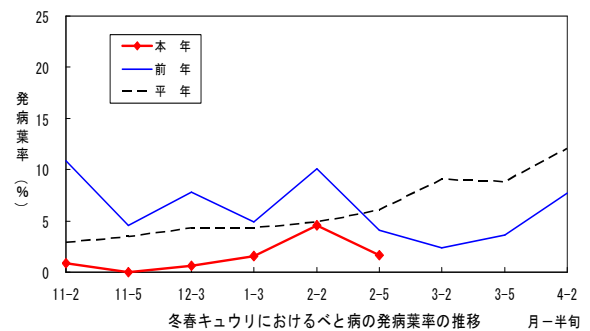
発病葉率 1.7%（平年 6.1%、前年 4.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並とされている（±）。

#### (3) 防除上の注意

ア 病勢が進展してからでは防除が困難であるため、初期防除を徹底する。

イ 肥料切れや成り込みによる草勢の衰えは発生を助長するので、適正な肥培管理を行う。



## 2 うどんこ病

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

### (2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

発病葉率 6.2% (平年 2.6%、前年 12.0%)

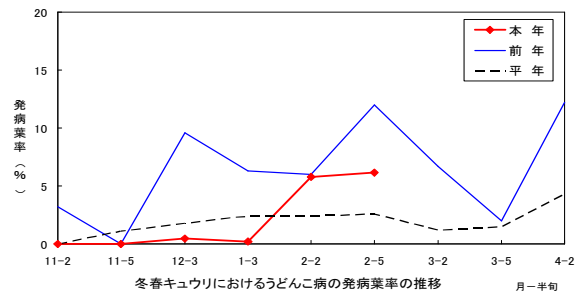
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並とされている(±)。

### (3) 防除上の注意

ア 罹病葉はできる限り除去するとともに、葉の裏側にも十分かかるよう丁寧に散布する。

イ ハウスの換気を行い、多湿にならないように管理する。

ウ 薬剤耐性菌の発生を防止するため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



## 【野菜共通】

### 1 ミナミキイロアザミウマ

#### (1) 予報の内容

発生量：ナス 平年・前年より多  
：キュウリ 平年並、前年よりやや多

#### (2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量はナスでは平年より多かった(+)。

キュウリでは平年並であった(±)。

ナス寄生葉率 12.7% (平年 5.7%、前年 12.0%)

キュウリ寄生葉率 0.7% (平年 1.8%、前年 0.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並とされている(+)

#### (3) 防除上注意すべき事項

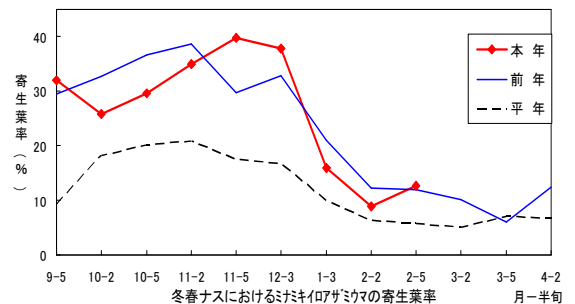
ア ほ場内外の雑草を徹底して除去し、害虫の生息、増殖源を絶つ。

イ 葉裏への寄生が多いので、散布むらがないように丁寧に散布する。

また、多発した場合は、約一週間後にもう一度薬剤散布を行う。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ 本種は、キュウリ黄化えそ病(MYSV)の媒介虫なので、発病株は早期に抜き取り、ほ場外へ持ち出す。



## 2 コナジラミ類

### (1) 予報の内容

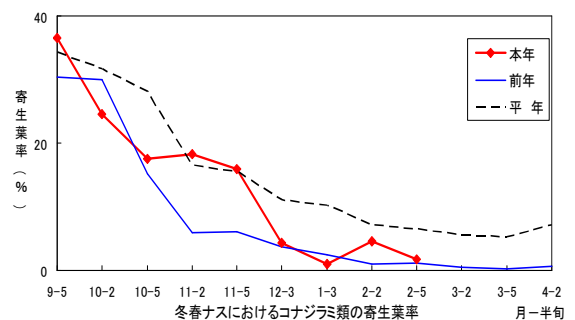
発生量：ナス 平年よりやや少、前年よりやや多  
：トマト 平年・前年並  
：キュウリ 平年よりやや多、前年並

### (2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量はナスでは平年よりやや少なかった(-)。

トマトでは平年並であった(±)。

キュウリでは平年よりやや多かった(+)



ナス寄生葉率 1.8% (平年 6.5%、前年 1.1%)  
 トマト寄生葉率 0.4% (平年 1.4%、前年 0.4%)  
 キュウリ寄生葉率 1.0% (平年 0.2%、前年 0%)  
 イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、  
 降水量は平年並とされている (+)。

(3) 防除上注意すべき事項

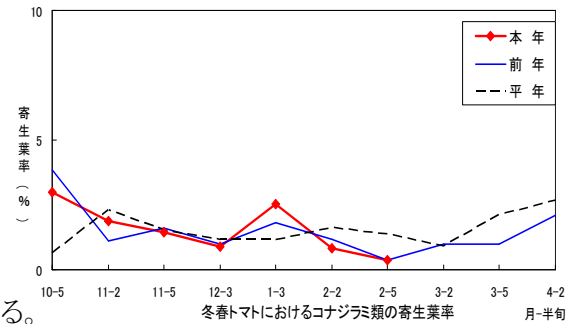
ア ほ場内外の雑草の除去を徹底し、害虫の生息と増殖源を絶つ。

イ 幼虫や蛹が寄生している下位葉は、できる限り除去する。

ウ 葉裏や下位葉にも、薬液が十分かかるよう散布する。

エ 施設栽培では成虫の飛び込み防止のため、0.4mm目以下の防虫ネットを隙間なく張る。

オ 本種は、トマト黄化葉巻病 (TYLCV) ・キュウリ退緑黄化病 (CCYV) の媒介虫なので、発病株は早期に抜き取り、ほ場外へ持ち出す。



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (3月の発生予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
冬春イチゴ 灰色かび病	並	並	並	・罹病果は感染源になるので、見つけ次第除去する。 また、下葉かきを随時行い、株間の通風を図って湿度を低下させる。
冬春ナス 灰色かび病	やや少	やや少	やや多	・開花後の萎れた花卉、罹病葉や罹病果実は、伝染源となるので早めに除去し、ほ場外へ処分する。
冬春キュウリ 灰色かび病	並	並	並	・開花後の萎れた花卉に、灰色のかびを認めたら防除を開始する。
褐斑病	やや少	やや少	やや多	・初期防除を徹底する。

## 【茶】

### 1 カンザワハダニ

#### (1) 予報の内容

発生時期：平年やや早

発生量：平年よりやや少、前年よりやや多

#### (2) 予報の根拠

ア 2月5半月調査の結果、裾葉での発生量は平年より少なかった（－）。

(裾葉)

寄生葉率 1.7% (平年 4.1%、前年 2.6%)

50葉当たり寄生虫 1.4頭 (平年 6.0頭、前年 0.3頭)

発生ほ場率 38.9% (平年 60.7%、前年 38.9%)

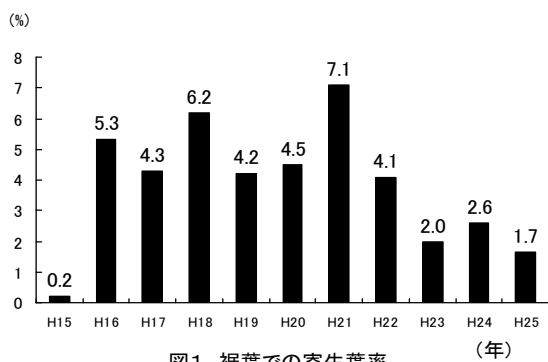


図1 裾葉での寄生葉率

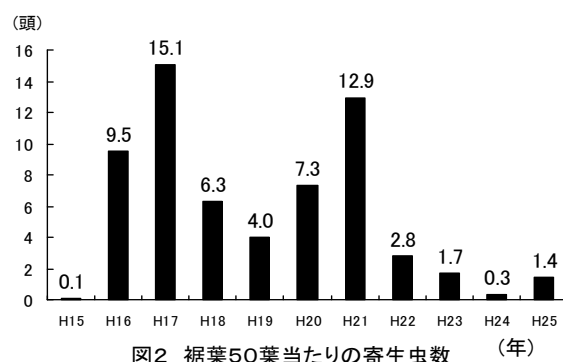


図2 裾葉50葉当たりの寄生虫数

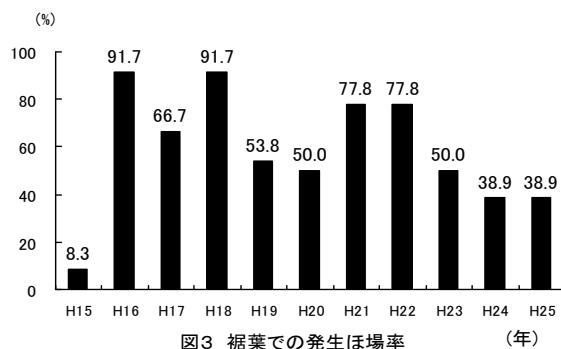


図3 裾葉での発生ほ場率

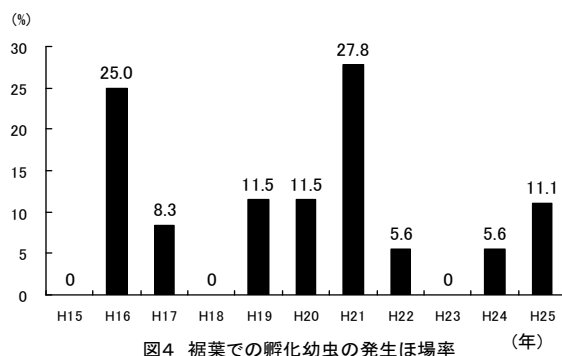


図4 裾葉での孵化幼虫の発生ほ場率

イ 裾葉での越冬後第1世代孵化幼虫の発生ほ場率は、平年よりやや多く、現在のところ発生時期は平年よりやや早い（＋）。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並かやや高いと予想されており、今後さらに発生量の増加および表層への移動が予想される（＋）。

#### (3) 防除上の注意

ア 裾葉を中心に発生状況をよく観察し、越冬成虫の寄生葉率が2%以上である場合は、成虫、幼虫、卵に効果の高い薬剤で速やかに防除を行う。

イ 春期の基本防除は、孵化幼虫の発生初期をねらって、平坦地で3月10日～20日頃、山間地で3月20日～30日頃を目安に徹底する。

ウ 薬剤は、寄生の多い裾葉・葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

オ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p8の内容を確認の上、適切に実施する。

# 農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では農薬の安全かつ適正使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮等、関係機関、団体と一体となって取り組みます。

散布者の安全はもちろん、人・作物・有用昆虫・環境に対する配慮について、指導を願います。

なお、「ベンゾエピン」を含む製品（商品名：マリックス、チオダン）が平成24年4月から使用禁止農薬になりましたので、併せて指導を願います。

## 1 農薬ラベル確認の徹底

（適用作物・使用量や濃度・使用時期・総使用回数）

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する  
（例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる）

## 2 散布前における情報提供の実施

※事前に周辺住民や養蜂関係者へ農薬使用に関する十分な周知に努める

## 3 散布時には近隣作物や住宅街への飛散防止対策の徹底

※風、散布方向、散布時間、散布圧に留意

※飛散しにくい農薬（剤型）や、飛散が少ないドリフトレスノズルを使用

※散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意

## 4 散布後は必ず散布器具（タンク、ホース等）を3回洗浄

## 5 防除履歴の正確な記帳

※薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布年月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳

## 6 空容器の適正な処分

※野焼きは法令で禁止されているので行わない

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/>  
電子メール [kfok0301@sp.jppn.ne.jp](mailto:kfok0301@sp.jppn.ne.jp)